ヒューマノイド、ミシェルの恋歌

蒼雲 騎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒューマノイド、ミシェルの恋歌

【Ｎコード】
Ｎ６２８８Ｇ

【作者名】
蒼雲　騎龍

【あらすじ】
人工的に生み出された美少女、ミシェル。アイドルとして生み出された彼女は、世界初の脳を持ったヒューマノイドである。天才科学者、神主と生きる彼女は何を得て、何を生み出すのだろうか・・・。ミシェルについての詳しい詳細は、下記のアドレスへｈｔｔｐ：／／ｉｐ．ｔｏｓｐ．ｃｏ．ｊｐ／ｉ．ａｓｐ?ｉ＝ｈａｔｓｕｎｅｍｉｃｈｅｌｌ

其の一話

1、新たなアイドル

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーぷろろ〜ぐーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

そこは・・・東京のアキハバラの某所。　ビルの地下深くにあるラボラトリー。

テニスコート一つは入りそうなだだっ広いフロアに、何やら小難しい機械が一杯在る。

フロア右のカプセルベットを前にした白衣の男は、カプセルの中に眠る裸の若い女性を見ている。　男は、大人びたインテリ然としたイイ男である。　眼前に掛かる髪を揺らして、裸の女性の顔をじっと黙って見つめていた。

一方、寝ている女性は、可愛らしさと綺麗さを兼ね備えた若い女性で。　生きているのか、はてさて死んでいるのか・・・。　まるで絵本に出てくる眠り姫のような感じであった。

そして・・・・・徐に。

「フフフ・・・あはははは・・・あーっははははは、いよいよだ・・・いよいよ・・・・」

と、白衣の男性は笑い出し、タイル張りの天井を見上げた。

「出来ね～な。　何が悪いんだろう？　う～ん、コレで後は眼を覚ますんだがなぁ～」

再度女性を見つめて、頻りに悩む白衣の男。

男の後ろには、少し間を置いてテーブルが在り。　カップヌードルの閉め忘れた蓋が開いて、湯気を上げていた。

すると。　男性の左側、様々な部品や工具が置かれている重厚な金属のテーブルの隅で、この場に似合わぬダンシングフラワーのような、白い百合の花がクネクネと花の部分を動かしては。

「イツマデアノマンマ？　マスター、ヌードルガノビチャウヨ」

と、喋るではないか・・。

「ん？　あ〝ーーーーっ、ヌードル忘れてた！」

男は、急いでカップヌードルに向かった。

さて、カップヌードルを啜る男は、映画俳優にでも成った方がいいのではないかと思うぐらいにいい男だ。　柔らかい黒髪は、眼や耳に掛かり柔らかい印象を与える。　整った顔は知的で理性的。　歯は白く、瞳は切れ長で、鼻も程よく高い。

更に、背も日本人男性にしては中々高く、１８０位はあるだろう。

すっきりとした痩せ型で、立った姿は凛々しさを感じさせる。

彼は一体何者なのだろうか。

そして、カプセルに入っていた女性は・・・一体。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーー

２０ｘｘ年、春。

毎日の乗降客数１５０万を超える東京のデジタルマーケットシティ、“アキハバラ”。　電化製品ならなんでも揃い、デジタル家電の聖地でもある。　メイドやコスプレ姿の者が街に居たり、ゲーム、映像ディスクの類から、様々なご禁制品まであるモンスターシティー。

その、アキハバラの駅前に近年オープンしたのが、地上１５０階を超える高層ビル。　その一階の入り口では・・・。

「お帰りなさいませ、ご主人さま！」

笑顔で可愛いメイドさんがお出迎えしてくれる。

【シャ・ン・グリ・ラ】

理想郷と名づけられたビルの一階には、今や大人気のコスプレメイド喫茶が有り。　進化し続けるアキハバラの名物に成っている。
安心価格の料金設定に、最新デジタル技術の装置で行われるイベントや、有名アイドルなどによるサイン会や握手会。　明るい店内、

入りやすいオープンテラスも二階にあり、駅から伸びた連絡通路からも来れる。

だが、施設はコレだけに留まらない。

地下1階は、イメージコスプレクラブとして、夜になると踊る女の子やヲタクやオジサンが集まる盛り場に。　更に地下2階は18禁施設・・。

地上部も、3階から5階までは、レストラン街。　6階から10階まではデジタル家電の販売フロア。　15階までは、ゲームから映像・音楽ディスクに、本やコスプレ販売店などが入っていて。　16階から上50階までは、他社オフィスが入っている。

そして51階より上は、この【シャ・ン・グリ・ラ】の会社の専用オフィスとなっていた。

さて、今、働いているメイドの女の子の中には、人であって人では無い者が居る。　人工的に生み出されながら、人間と同じ感触の肉体を持つ“ヒューマノイド”と呼ばれる彼女達。　この技術を初めに、数々の天才的な発明で特許王と言われ、このビルを経営しているのが・・・。

「いらっしゃいませ。　我がシャングリラに、何をお探しですかな？」

と、ロビーの受付で立派なスーツに身を包み、接客をしている男がそうだ。

あの、冒頭では地下のラボラトリーに居た男で、名前は≪神主　鷹

博：カンヌシ　タカヒロ≫３５歳。

現実に、十年前。　アイドルとしての初ロボットであるアンドロイドを生み出して、莫大な利益を上げた人物だ。

人と同じ外見で、中身は防犯にも役立つロボット。　今や、女の子を置く店に一台はあるアンドロイド。　全く普通の人とは見分けがつかない。　しかも、人工知能を使って学習し、コミニュケーション能力も高い。

しかし、やはり生身の女性には、その価値が敵わないのが現実。そして、その進化系がヒューマノイド（人工人間）である。　しかし、今だ完全に自立・独立した知能のヒューマノイドは居ない。まだ、研究途中なのだ。

こんな彼だから、学会や倫理を重んじる人々からは、“マッドサイエンティスト”とか、“変質科学者”と言われている。

しかしながら、無償の純粋無垢で人を愛せるヒューマノイドの要望も高く。　姿の見えぬサイエンティストと異名を付けられ、雑誌などでは“ミラージュ神主”と書かれる彼。　そんな彼にに逢いたいと思う人の数も、毎日尋常の数では無い。

さて、神主は受付から姿を消して、今度はメイド喫茶の更衣室ロッカーにいた。　彼は気分転換に、こうして各階の店に顔を出しては、従業員として勝手に働いているように見せている。

現実の表向きの経営は、親友の男女数人に任せていて。　彼はもっぱら研究開発の日々であった。　この男が、影の経営者と知る者は、会社でも極僅か。

だから。

「あ、カンちゃんだ～」

「ホントだ、久しぶりぃ～」

「マジで、２週間ぶりっぽくない？」

彼がメイド喫茶に出れば、こんなセリフをメイドの格好をしたバイトの女の子達から貰いながらも。　メイドの女の子達と結構仲良くやって居て、神主自身はウエイターをする。　メイドの女の子達からは“時々バイトの男”とも呼ばれている。

「カンちゃ～ん」

神主の元に、一人のメイド姿の女の子がやって来た。

「ん？　ミエコか」

張りの有る甘い声よし、やや童顔の愛らしい顔でルックスよし、気配りや気の回る八方美人で性格よし、８９・５６・８５のスタイルでボディーよしの人気メイドのミエコである。　やや胸元が見えるような姿で、指名率ナンバーワン。　毎日ファンの男性に貢物を貰い、日常の服装もかなりのおハデさんな１９歳。

ミエコは、神主の腕に絡み着いて、

「ね～ね～、カンちゃん。　今度、デ～トいこ。　ね、奢るからさ」

神主は、此処では貧乏バイト中年で通っているのだ。　だから、よくバイトの女の子に奢られる。

（全く、今時の若いコは恐れを知らん）

神主は、常々最近の若い女の子気持ちが解らない。　自分のような男でも、無防備甚だしい。

「まぁ、気分が乗ったらね～」

イケメンで、中年の魅力溢れる神主に想いを寄せる女性スタッフは多い。　だが、本人の自覚は微妙にズレる。　知性という点では自負があり、格好も付けるが。　ルックスにおいては、自覚も無いし。興味が無いらしいのだ。

「ミエコちゃ～ん、ご指名来たよ～」

午後の日差しが入る窓側から来た別のメイド姿の女の子が指名を告げに来た。

「ハ～イ」

ミエコは、神主に近づいて、胸元を見下ろせるようにして上向くと。

「じゃ～ね。　デ～ト誘ってね～」

と、お客さんの方に行く。

（ま～ったく）

呆れている神主に、バーカウンターに居るスキンヘッドで格闘選手のような巨人男が。

「おう、カン来たのか？　休日で人手が足らん。　ウエイターに入れや」

「へーい」

神主は、社長代理の面々の友人として雇われているように装っている。　間隔週１で入ってるバイトウエイターなども、珍しいものだ。

神主は、メイドの女の子達や、お客のヲタクを見て、日々の研究のアイディアに役立てている。　こうゆう事をする事に、疑問もなにも持たない男なのだ。　いきなり思い立った様に長旅にも出れば、３日もゲーム三昧でいたり、気が向くとこうしてバイトにもやって来る。

「注文入りま～す。　コ～ヒ～とぉ～、ケーキミックスひとつ～」

メイドの女の子の声があちらこちらで上がり、神主は出来上がった料理やドリンクを運ぶ。　運ばれたテーブルでは、メイドの子が受け取って、ご主人さまなる方々にオススメしてる。

「ラッキ～ジャンケン、プイプイパ～」

何だか解らない呪文を唱えるメイドと、お客を見て。

（オワタ・・・セカイはオワタ～）

と、神主は呆れて思った。

さて、様々なアニメやゲームの女の子のキャラクターが、店内を彩る。　ホログラフィックスの踊るキャラクターや。　３Ｄ映像のリアルな姿で、流行のアニメソングを歌うアイドルキャラクターのオブジェも見受けられる。

２階店内の奥には、アニメやゲームのワンシーンをカラオケならぬ、なりきり吹き替えでメイドの女の子と遊べるルームもある。　自分で映像を持ち込みなので、なかなかどうしてお客の層も幅広い。

こんな感じで、今やメイド喫茶業界の変化の流れも速く。　もはや、アンドロイドには擬似ではなく、人と同じ物が求められていると神主は考えていた。

（ん～、生身の女の子は売れると思うんだよなぁ～）

今の研究は、まさしくそのアイドルを生み出す為の研究だ。

神主は、夕方まで働いて。　時間になったら早々に地下に舞い戻った。

専用の地下通路で、地下四階まで降りてから、卵型のエレベーターで一気に深い地下に降りた。

エレベーターが止まった地下５００メートルの神主のオフィス。
開いたクリアーブルーの扉の外に出れば、左右に観葉植物が床に埋まっている大理石のような石の床・壁をした通路が延びる。　途中の出っ張った壁に掛かった白衣をスタイリッシュに纏い。　神主はラボラトリーに入った。

すると・・・。

「ん？」

左の奥に在る巨大スクリーンのコンピューターの手前にある椅子に、何者かが座っている。　スクリーンには、神主の記憶させてあった、アクション映画が流れていた。

「・・・まさか・・・ミシェル・・・？」

神主がそう口に出した時、座っていた人物がこちらを向いた。

神主は、やや驚きの眼差しで歩いて行く。

向こうも、椅子から降りて歩いてきた。

裸の女性・・背丈は１６０くらいか。　胸が形の良い張りを見せて、歩くたびにプルプルと揺れている。　可愛らしく麗しい顔立ちで、彼女は笑ってる。

神主は、女性まであと五メートル手前までで立ち止まり。

「ミシェル・・・起きたのか？」

すると・・・。

ミシェルと呼ばれた全裸の女性は、笑ってクビを傾げて。

「タカヒロ様ですね。　ミシェルで～す。　よろしくおねがいしまぁ～す」

やや甘えた感じの透き通る声。　声優にでも使えば人気が出そうな・・・・。

（フム、何で起きたんだろう・・・・。　ま、いいか。　私が天才と云うことにしとこう）

こうして、ミシェルは生み出された。

彼女は、完全な人間の肉体と心を併せ持った人工人間なのだ・・・・。
もはや、彼女の脳は制御された人工知能ではなく。　完全に人と同じ、自由な感情の芽生える脳であった。

神主は、白衣を脱いでミシェルに投げた。

ミシェルの頭から前面に白衣が被って隠れる。

「それを着てなさい。　どうやら、お前の服を上にお買い物だな。
どれ」

神主が携帯を取り出して電話を掛けるのを、白衣を着ながらミシェルは微笑んでいる。

神主とミシェルは、こうして生活を共にする事に成った。

其の一話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

知り合いと共同で生み出したミシェルのノベルです＾＾

このノベルが、ある意味でミシェルに命を吹き込む物と思って書いています＾＾

これからのご愛読、よろしくお願いいたします＾人＾

其の二話

2、動き始めた心

ミシェルが目覚めた次の日の事。

「ん・・・」

神主は、ぼんやりと目を覚ました。　何だろう・・・目の前に何か見えている。　ピンク色・・・・文字・・・・少し左右に伸びていて・・・。

「んあ？」

気付けば、何時の間にか横に寝ているミシェルの胸だ。　じーっと見ているウチに、神主はいきなりミシェルの胸を触ったではないか。　しかも、軽く揉んでみると。

「いや～ん・・あはぁ・・」

ミシェルが眼を覚まして、甘い声を放つ。

神主は、身を起こした。　上半身はハダカで、下にはトレーナーズボン。

「ミシェル、起きたか？」

眼を覚ましたミシェルは、左手で胸を押さえながら身を起こして。

「はぁい」

と、恥かしそうに・・・。

神主は、ミシェルに。

「ミシェル、なんで一緒に寝た？」

少しぼんやり気味のミシェルは、

「だってベットが一つしか無いんですぅ」

「フム」

ミシェルの上はTシャツ、下は下着のみ。　髪も解けて色気がある。

「ミシェル、胸を触られて感じたか？　触られて嫌だったか？」

ミシェルはベットから出て、立って神主を見ると。

「イヤ・・ではありませんけどォ～。　なんか恥かしいですぅ・・。
それに、感じるのは普通です」

ベットの上の神主は、頷いて納得する様子。

「フム・・・生体反応も性感帯反応も羞恥心も女性意識も学習完璧
だな」

ミシェルは、少し赤らめた困り顔で。

「タカヒロ様、あのぉ・・毎日触られるのですか？」

神主も起きて、ベットより抜けると。　顔を洗いに洗面台に向かいつつ。

「定期的に触るだろう。　ミシェルの反応がどう変わるか、調べないと」

と、言いながら内心。

（学習機能に、人間の精神の指導要領が多すぎたかな？　拒絶反応が出るかもしれないな）

あくまでも、ロボットを扱うような神主である。　神主は、基本的に女性との恋愛はしたことが無い。　イヤ、むしろ恋愛などは詰まらないモノとすら捉えている。　神主は、女性にモテ囃されるが、自身は研究一筋人間であり。　全ての行動は調査・開発・発見に求める追求のみ。

神主は、そうした人間だった。

さて、寝室であり私室でもあるこの部屋で、神主はコンピューターに向かい、ミシェルの行動のアレコレを打ち込む。　崩れた髪形、羽織っただけのＹシャツ、いい加減な姿ですら神主はデキル男に見えてしまう。

太陽と同じ光りを放つパネルライトが、部屋の天井一面に填まっている。　眩しい程に明るい、朝陽に包まれているようだ。　この部

屋は、神主のバイオリズムに合わせて照明が変わっていくのだ。
１２畳の間取りの広い部屋は、観葉植物が部屋の四隅や神主の向かうデスクを仕切りのように囲っていたる。　インテリアとしても、空間に緑の調和を与えて、殺風景さを打ち消していた。

「ハイ、タカヒロ様」

ミシェルが、コーヒーを入れてくる。　昨日買い与えられた短いビニールのようなピンクのスカートに、Ｔシャツ姿。

「ん・・・ん？」

神主は、コーヒーカップとミシェルを見て、チョット驚いた顔で。

「ミシェル、お前・・コーヒーの入れ方知ってるのか？」

お盆を持つミシェルは、ニッコリ笑って。

「は～い、昨日の映画に出てました」

「ほぉ」

神主は、無造作にモニターに向かいながら一口含んで。

「んぐっ、ぶっ！！！！」

口の中に爆発物に近い衝撃を喰らった感覚を味わい、おもいっきり横の植物の根元に吹いた。

「グホっ、ゲホッ・・・」

咳き込む神主に、ミシェルは驚いて。

「タ・タカヒロさま・・？」

神主は、胸焼けを起こした。　恐ろしいまでにショッパイコーヒーで、香りも異臭を突き抜け刺激臭に近い。

「げほげほっ・・ミ・・ミシェル砂糖と塩が・げほっ・・間違ってる・・・・。　それに、コーヒーの量が・・・濃過ぎる・・・うげえっ！」

ミシェルは、困って。

「あれぇ、見ていたのとちが～う」

と、キッチンフロアに走った。

「げふぅ～、これは教育必要だな・・」

神主も、渋い歪んだ顔でキッチンに向かった。　水で口を濯いでから、キッチンスペースを見てみれば・・・。

「おいおいおいおいおい・・・・」

新しいコーヒーのマメが、袋から半分は無くなっている。　しかも、ミシェルが自分でまたローストと云うか、焦げるまでオーブンで焼いて。　それから擂り鉢で粉々に粉砕したようだ。　コーヒーではなく、炭汁を飲んだような物だ。

「ふぅ・・・。　死ななかっただけマシか・・・」

神主は、不気味な冷汗すら掻いていた。　ミシェルにコーヒーメーカーとエスプレッソマシーンを見せて、作り方を教えた。　殺されては堪らない。

流石は、神主の生み出したミシェル。　遣り方を覚えれば、一発で作れるように・・・。

「仕方ない、今日は生活に必要な事を全て教えるか」

神主は、年中開発・年中フリーな人間だ。　どう生きようと縛られるものは無い。　のんびりと、教育実習に入った。　なにせミシェルは大切な実験体。　生活に困らないように、教育することにこれからの観察の楽しみも広がると云う物だ。

ミシェルも、肉体は人だから当然栄養は食事から。

まず、料理。

「いいかミシェル、フライパンはこうして使う」

神主が、見事な手さばきでチャーハンを作る。　幾つか料理を作って見せた。

ミシェルは、目をパチパチさせて観察していた。　そして、ミシェルに遣らせて目玉焼きを作らせれば・・・・。

「よっとぉ」

思い切り振り上げたフライパンから天井にブっ飛んだ目玉焼きは、天井にベタリと張り付いて下りてこない。

「ミシェル・・・力の入れすぎだ・・・」

眉間を押さえて、神主は困った。　ミシェルは、神主に対しての全てに無抵抗になるよう教育されているが。　基本運動能力は、オリンッピク選手並み。　人工的に生み出した強化筋力に至っては、軽自動車を軽々持ち上げる力を備えている。

二人で昼食をしてから。

「よし、ミシェル。　次は洗濯だ」

（これは大丈夫だな、全自動だから・・・）

と、思った神主が甘かった。

ミシェルは、色落ちする物と神主の白いＹシャツを混ぜようとするし、洗剤のボトルをそのまま口を開けて洗濯機に放り込む。　そして、やっと仕上がった服を、おもいきり畳もうとしてシワクチャにするし、アイロンを服の上に置いて黙って・・・焦げる変化を見るに終わった。

神主は、掃除を教えるのは止めた。　精密機器を壊されたくなかったから・・・・。

「最後だ、ミシェル。　これは使い方を覚えておきなさい」

神主は、ミシェルにラボラトリーの一角を占めるある装置の一つの

前に連れて行った。　まるで、６畳間のカラオケルームがガラス部屋のようになった場所。　中にある機械で、色々な歌や踊りの練習が出来る。　ミシェルは、アイドルモデルの試作品だから、歌と踊りは自分で率先してするように行動思考に記憶させてあるのだ。

「うわぁ～。　タカヒロ様、踊ったりしてみていいですか？」

ミシェルは、嬉しそうに聞いて来る。

「ああ、構わないよ。　夜まで、使って遊んでみなさい」

ミシェルは、にこやかに自動ドアのルーム内に入って行った。

（う～ん、ミシェルは生々し過ぎるかな・・・。　今思うと、もう少し機械的な方が良かったか？）

神主は、ルーム内で歌いだしたミシェルを見ながら、そう思う。

機械の説明をして、ミシェルと神主の慌しい一日は、終わった。

さて夜の7時頃。　神主は、ミシェルに入浴を教える為に、二人で風呂に入る事に・・・。　しかし、まずは脱衣所で神主を気にするミシェルは、中々服を脱がなかった。

さて、風呂場に入って神主は、石鹸をスポンシに軽く擦って泡立てて。

「いいか、こうして洗うんだ」

ミシェルも神主も3畳ほどの洗い場にお互い裸で居る訳で・・・・。

湯気のけむる風呂場にて、神主は自分の体を洗ってみせる。

ミシェルは、やや赤らめた顔の興味津々といった感じの眼で、神主の肉体を見ている。　特に・・・筋肉とか・・・腰のくびれとか・・・アレ？

「ドキドキ・・・ドキドキ・・・」

「要らん事云うな」

自分が洗い終える前に神主は、ミシェルに体を洗わせて、今度は自分がミシェルの体を洗う様子を見る。

「もっと全身を洗いなさい」

とか、アドバイスを言っても。　ミシェルは、神主に見られている事にどうも集中出来ない様子だった。

さて。　神主は、先に湯船に浸かってミシェルを見て。

「ミシェル。　お前、そんなに俺に見られて恥かしいのか～？」

ミシェルは、神主に背中を向けて首を左右に。　しかし、赤らめた顔も、神主に背中を向けて居るのも、明らかな恥かしさの現われだ。

「ふむぅ・・。　こんな事インプットしたかぁ～？　俺？」

神主は、ミシェルに。

「ミシェル、こっちに向きなさい」

すると、ゆっくりとミシェルは神主の方に向く。　どうも、怖がっている訳では無いが、顔を赤らめて変なのだ。

「ミシェル、今日の感想は？」

泡に塗れた手で胸を洗うミシェルは、モジモジとして。

「・・・神主様と・・お風呂・・・」

「それだけかぁ～？」

「は～い・・・」

神主は、呆れて湯気昇る天井を見つめたのである・・・。

其の二話（後書き）

どうも、騎龍です＾―＾

ミシェルの2話目ですわ＾＾；

いやいや、難しいな～＾＾；　アイドル関係の小説・・・＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

其の三話

3、ミシェルの初舞台

ミシェルが目覚めて、5日が経った。

「ミシェル、大体は解ったかぁ？」

神主は、ラボラトリーの大型モニター前に備わる椅子に、だらけた感じで座っている。　同じくモニター前の神主の脇には、頭をポニーテールにしたミシェルが座っていて。

「は～い。　ステージで、覚えた歌を歌えばいいんですね？」

「そうだ。　なるべく、可愛らしくな」

神主の研究において、ミシェルは実験体に等しい。　生身のミシェルが、どんな成長をするのか・・・神主自体もまだ解らないのだ。

（アンドロイドと同じならいいが・・・人工知能とは一線を画すからな～。　生の脳だし・・・）

神主は、友人の女性にミシェルの服を用意してもらった。　しかし、渋谷の有名店の服だ。　どうも、だらしなく見えると思う神主。ミシェルは、サイズの大きい長袖シャツに、短く黄色いダメージパンツ姿だが。　シャツは、首を通す穴が大きいシャツだから、肩口や首周りのブラのバンドが見えてる。

（肩は覗けるし、なんかキラキラしてるし、ダボついてるし・・・）

神主は、そのセンスがまったく解らないらしい。

さて。

一応、睡眠学習で、ミシェルには語学と音楽とアイドル的教養は植えてあるのだが。　今のミシェルを見る限り、人前に出してみないとどんなものなのかは解らないので、今夜からステージに立たせてみることに。

夜、7時。

シャングリラの地下1階にあるクラブにミシェルを連れて行く。衣装は、メイド服をアレンジした際どいワンピース。　スカートはフリルがついて短く。　上は背中が覗けるゴスロリ風のエプロンみたいな。

もちろん、神主はこんな衣装とは思わなかったが仕方がない。　その手の衣装を作る業者が、今時に合わせたと言うのだから。

毎夜地下1階の【クラブシャングリラ】は大盛況。　若者やサラリーマンが集まって、踊って飲んでショウを楽しむ。　店が今の流行りのアイドルを招いたり、歌手デビューも含めたオーディションも行われているから、自然と人が集まる。

若い女の子も、アイドルや歌手やタレントを夢見て集まって来るし。　そうした女性に誘われて男性も集まる。　大手芸能プロダクションも此処を無視出来ず、金の卵を探すスカウトも出没するし。　自

然とテレビの撮影も良く行われるし、ラジオ生放送の基地局の影響から朝まで客足が絶えない。

しかも、神主の会社の直営ホテルが隣に在り。　地下1階から地上部の3階までは健康ランドを有した施設。　そして、安い１０００円カプセルホテルから、高級ロイヤルスイートとして、高みからアキハバラを一望して見下ろす最上階部屋も在る。　ビルの中階層から上の階層は、東京の夜景やら摩天楼のような【シャ・ン・グリ・ラ】ビルも見上げれるので。　デートスポットとしても人気が高いらしい。

健康ランドも、寝る部屋もあるビルが在るとなれば。　自分のアパートやマンションに戻らないままに、半ば此処に住み着いている者達が幾人も居るとか。　住所不定の高給取りが、年間チャージ契約で部屋を借り切っているらしい。

さて、神主はミシェルを連れてクラブに来ると、殺風景な裏通路から入り口付近の受付裏側に入った。

事務所にて、アルバイトの職員やウェイトレスのバニーガール達に挨拶をしながら、部屋に似合わない黒い頑丈そうな扉の奥に入った。

そこは、暗い部屋でモニターが無数に配置された警備監視モニター室である。　神主は、モニターを見ている５０近い男性で、キッチリと正装した男性に声を掛けた。

「やあ、園田さん」

直立不動でカメラを見ている紳士は、神主を見るなり礼儀正しいお辞儀をして。

「これはこれは、神主様。　新しいアイドルさんをお連れとか」

「ああ、この子だ。　ミシェル、挨拶して」

ミシェルは、園田と呼ばれた紳士に、笑って。

「ミシェルです。　よろしくお願いします」

紳士は、頷いて。

「とても美しい愛らしいお嬢さんですな。　支配人を任されております園田と申します。　これからは、よろしくお願い致しますね。　ミシェルさん」

「は～い」

園田と言う人物は、温厚そうな男性であり。　落ち着いた雰囲気も紳士風な、ロンマンスグレーの香り漂う支配人であった。

そんな二人のやり取りを横目で見ていた警備員の若者が、ミシェルの体や顔に目を奪われていた。

（エロくて・・、かっ・可愛いぃ～）

神主は、ミシェルを園田に預ける。

「園田さん。　俺は、ステージに上がって司会を入れますから。園田さんは、ミシェルをゴンドラで降ろして下さい」

「はいはい、畏まりました」

神主は、また事務所に出て更衣室に向かうと、用意しておいた正装に身を包んだ。　黒いタキシード姿の神主が事務所に出れば、バニーガール達は喜んで寄ってくるし。　スタッフの女性達も、神主に挨拶を重ねた。　それほどに、神主がイイ男と云う訳だ。

神主は、事務所にて待機していて、園田氏の合図を貰うとマイクを持って専用通路を行き。　ダンスフロア奥のステージに上がった。　およそ５００人は入れるダンスフロアの中央と、奥の高い位置にあるステージ。　七色のライトが光る中で、神主は満員近いフロアの踊ったり飲んだりしているお客に向かって言った。

「レディース・アン・ジェントルメン。　本日は、新しくデビュー致しますアイドルをご紹介致します」

ダンスミュージックが中断し、踊っている客や喋っていた皆がステージに注目した。

神主は、微笑み顔で皆を見回して。

「今宵、皆様にご案内致しますのは、密かに探し出したる美少女。　名前は“ミシェル”。　彼女の歌、華麗なるダンスを、得と楽しんで下さい」

神主は、奥ステージの上に向かって。

「カモーンっ！！　ミシェルっ！！」

すると、軽快なリズムと白い煙がステージに広がり、天井からゴン

ドラに乗って降りるミシェルの姿が。

直ぐに、飲んでいたサラリーマンの一団の一人が、

「おお、中々可愛いじゃないか」

「イイねぇ～、ちょっとエロ可愛いじゃんか」

踊っていた若い女の子も、手を振って声を飛ばす。　このクラブでステージに上がる者は、生半可な歌声やダンス力では無理なのは誰でも知っている。　クォリティーの高さも、ちゃんと定評になって居る訳だ。

「歌ってー！　ミシェルっ！！」

「踊ってーっ！！」

と、賑やかな声が叫ぶ。

ま、神主が連れてくる今までのアンドロイド達は、歌も踊りも上手くて人並みを外れていた。　だからショウでは何時も大盛況。　しかも、今日は生身の女の子のアイドルが登場との触れ込みで。　ミシェルを知らずとも、ショウに期待して見に来た客も多い。

ミシェルは、可愛らしい微笑みでゴンドラから手を振り。　緊張も見せずに、

「みなさ～ん、ミシェルで～す。　今日からがんばりま～す」

ややユルいキャラの喋りながら、声がハッキリ通って爽やかに聞こ

える。

ゴンドラがステージに下りて、神主が寄って手を貸せば。　ミシェルは、神主の手を借りてヒョイっとゴンドラの柵を乗り越える。下のアングルから見ている男性客は、チラチラ下着が見えて口笛が飛んだ。

ミシェルは、いきなり変わったダンスミュージックに踊りだして。

「“恋のダウジング”からっ、レッツゴー！！」

遂に、ミシェルは歌いだした。　踊って歌って・・・。　アイドル声なのに、何故か優しく響く透明感。　派手ではないけど、スタイリッシュに踊りを決めて、振り撒く笑顔と澄んだ瞳からの視線・・・。

ミシェルのアイドル性に魅了されて、フロアは一気に一つに成って行く。　一曲一曲が終わるたびに口笛やコールが飛んで、全員がミシェルに釘付けになっていった。

舞台の裾で見ている神主。

（お～お～、やはりミシェルは今までのミシェルと違うなぁ～）

と、かなりの満足気だ。

神主は、試作レベルでのミシェルイメージで、アンドロイドのロボットで土台の試行錯誤を繰り返していた。　どのアンドロイド達もミシェルを産む為のアイドルロボットであり、進化の先の究極形態が、今のミシェル。

声だけで、歌を流したミシェルも有ったし、踊るだけのミシェルも有った。　だが、ミシェルとして、人の形でのミシェルは今の彼女が正真正銘。　神主の求めていたモノが、現実になったのだ。

何曲も歌うミシェルに沸いた夜は、過ぎる時の速さを麻痺させて。
　夜遅くまで客達を虜にしていた・・・。

深夜１２時。　ミシェルのサヨナラまで、お客は帰らず。　噂で集まって来た後からのお客で、クラブは満員を超えた。　ラストナンバーの【涙のソウルヴォイス】のバラードナンバーで、客席は歌声に聞き惚れて静まり返ってしんみりとしたが・・・。

歌い終わった後。

「ミシェルゥーっ、また来てねーーっ！！！」

「アンコールしてくれーーっ！！」

「ミシェル最高ーーーっ！！」

去るミシェルに、騒ぐ声は収まらなかった・・・。

其の三話　（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ミシェル第三話・・・・何処までいけるかな＾＾；

のらくらがんばりますんで、よろしくおねがいします＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

其の四話

4、ミシェルの歌声

「ようこそ御出で下さいました。　本日は、ミシェルの歌声です」

神主が、またタキシードに身を包み。　ミシェルの3回目のステージ案内をした。

「ミシェルーーっ!!!　今夜も最後まで歌ってーーーっ!!」

「ミシェルちゃーーーーん!!」

客の熱狂的な声は飛べど、ステージにミシェルの姿は無く。　客は、神主の案内で登場すると思い、何度も声を飛ばす。　しかし、ミシェルは現れない。

会場中が、見る見る静まり・・・ポツリ・・・ポツリとざわめきが・・・。

「どうした・・・」

「デマ?」

「アクシュデントかな?」

「ミシェルちゃんは?」

ダンスホールが、ざわめき出したその時だ。　いきなり、客の中から中央小ステージにジャンプして飛び上がる人影が・・・。

「あっ！！！」

「ミシェルっ！！！！！」

「キャーーっ！！　ミシェルぅ！！」

花の髪留めを着け。　モスグリーンのベトナムの民族衣装をドレスにしたような、アジアンチックな姫君のような可憐で可愛いミシェルが立っている。

「みんなぁ、ミシェルで～す。　今日も、思いっきり歌うよぉーっ！」

にっこり笑顔のミシェルに、ダンスフロアの熱気は一気に最高潮に上がった。　今夜は、ミシェルはゴンドラには乗らず、奥ステージからダンスフロア中央へと伸びるロードの先にある円形小フロアに、客に紛れて近づいて・・・いきなりの登場という演出だった。

軽快なサウンドのカヴァーナンバーに始まった。

途中、

ｋｉｓｓ　ｍｅ

ｎｉｇｈｔ　ｄｉｓｔａｎｓ

ｍａｚｅ

と、自前の曲を歌い。

途中、中休みとばかりにトークを神主と・・・。

「えぁ～みなさん、ミシェルです。　今日も集まってくれてアリガト～」

と、彼女が手を振れば・・。

「ミシェルーっ！！」

と、“ミシェル命”の鉢巻に、アニメアイドルのプリントをしたＴシャツの若者達が声を上げた。　もう、コアなファンがついたらしい。

ミシェルは、神主の教育も在る為か。　ファンサービスの一環で、

「アリガト～。　最後まで聞いていってね」

と、首を傾げる。

お客の酔ったオジサンから、

「ミシェルちゃん、今夜のパンツの色は？」

と、声が。

客の一部が、嫌な顔をサラリーマンに向けるも。

ミシェルは、笑顔で。

「ンフフ～・・・明るい色ですよ～。　でも、ナ・イ・ショ」

と、口に指を当てた。

客から、

「歳は？」

とか、

「好きなタイプの男性は？」

とか、色々質問が飛んで、ミシェルは笑ったり・・・困ったり・・・

神主に小声で聞いていたり。　その純粋な仕草は、何処か欲に染まっていない天使のようで、愛らしく見える。

そして。

トークの後は、神主の作詞の曲を・・・。

神主自信が、立ち上がり

「さあ皆様、今夜は新曲も行きます。　最後3曲は、オリジネルナンバーでどうぞ」

すると、お客の女性から。

「ナビゲーターさんカッコいいーーっ！！！」

と、黄色い声が。　ここは、情報厳守で、携帯のカメラを使うのは禁止されているのだ。　だから、メールは打てても、撮影はされていない。　最高技術のセンサーで管理されているのを、客は開店当初で把握している。　１０００万近い罰則金を誰が払えるものか・・・。

歌うミシェルは、何処か恥ずかしそうにして。

「聞いてください・・・恋歌です」

ミシェルは、歌いだした・・・。

1

ふと瞳が覚めた朝　君が　　隣にいて
ありふれた毎日　愛だ　と感じた

離れている時でも　毎日　の思いが感謝で紡げるの　なら

＊　Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　　ＬＯＶＥ　ＡＧＡＩＮ　　涙流した
淋しい夜も有　ったよね
Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　　ＬＯＶＥ　ＡＧＡＩＮ　　愛して居
ると誓い合った　言葉　今でも君だけに

2

ケンカした時には　君が　　先にゴメン
君のムクれた顔　ちょっ　と好きだよ

離れている時でも　二人の　想いを確かめて

涙を見せずに

＊　Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　　ＬＯＶＥ　ＡＧＡＩＮ　　涙流した
　淋しい夜も有　ったよね
　　Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　　ＬＯＶＥ　ＡＧＡＩＮ　　愛して居
ると誓い合った　言葉　今でも君だけに

＊　Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　　ＬＯＶＥ　ＡＧＡＩＮ　　変わりは
しない
　Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　君を抱き寄せた
　　Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　　ＬＯＶＥ　ＡＧＡＩＮ　　背伸びし
ないで　この手　繋ぎ合って　歩いて行こう　二人　いつまでも・・

（愛・・・って・・・なんだろう・・・）

ミシェルは、この歌を歌いながら、その意味を考える・・。　生まれて間もないミシェルは、愛がなんたるかが・・・解らなかった。
　涙を流した事も・・・怒った事も無い・・・。

（この歌・・・何て意味なんだろう・・・）

歌詞の意味が・・・ミシェルには解らなかった。

そして、次の曲・・・。

【ｍｏｎｏｃｈｒｏｍ】

冬が便りを風に乗せ　秋を静かに諭すの
アナタと別れた記憶　まだ新しい彩みたい
寒い空気に急かされて
仕事の日々に薄められて
色褪せていく愛の写真…
※一人の時間に流す涙が冷たくて　凍えてしまうの私…　逃げる思
い出がシルエットみたい　ｍｏｎｏｃｈｒｏｍ　ｍｅｍｏｒｙｓ

部屋に残る二人分の物達が　語る楽しかった時間を
ふと感じてしまう私　リセット出来ない記憶
街を歩く嬉しそうな恋人達を見る度に想ってる
湧き上がる愛情だけが…
※降り注ぐ白い雪に洗われて行く　二人で汚した愛の言葉…　終わ
らない愛をまた捜すから　ｍｏｎｏｃｈｒｏｍ　ｍｅｍｏｒｙｓ
想い返せる時に輝くまで…　ｍｏｎｏｃｈｒｏｍ　ｍｅｍｏｒｙｓ
私アナタを愛してたわ…

ミシェルは、この歌で泣いていた。　どうしてか解らない・・・ただ・・・涙が溢れてしまったのだ。

2曲を歌ったミシェルは、目を瞑っていた上に客の声が聞こえなくなっていたのにフット気付いた。

（あ・・・）

暗く照明を暗くしたダンスフロアの中、お客達はシーンと静まり返ってミシェルを見ている。　客の半分は・・・・涙を拭わずにそのままに・・・。

ミシェルの完成系の歌声は、響き・声色・浸透力、どれもが洗練されている。　神主がそうゆう遺伝子を組み込んだのだが・・・。

ステージ脇の暗幕の影に居る神主は、腕組みで見て頷く。

（フムフム、いい出来だ・・・。　ミシェルは、歌うほどに声の質感が洗練される。　これは、いい商品だ）

と、思う反面。

（そう言えば～・・・。　遺伝子の組み込み方はデータあったけど・・・遺伝子の分裂残留レベルのデータ無かったなぁ。　ん～・・・もう少ししたら、ミシェル2号でも造るか）

と、また研究の事を考える。

そこに、後ろから園田が遣ってきた。

「神主様、ミシェルさんはいい歌手ですな」

神主が、初老紳士の園田を見れば、ニコニコとミシェルを見ている柔和な園田が居る。　園田氏は、作り笑いのポーカーフェイス人間で、こんな感情を見せて笑う男性でもないのだが・・・・。

「ま、俺の目に狂いは無いって事さ」

その時、ミシェルは深夜１２時の鐘が鳴るのを聞いて。

「時間・・・押しちゃったけど、最後の曲・・・行きますね。　“輝く羽”です」

ミシェルが、日本舞踊のように舞い踊る為のクラシカルな曲が流れ・・・。　静かな曲のサウンドに変わった・・・。

【シャイニング・フェザー】

1

疲れ果てた私は逃げ回り　　都会の片隅に隠れるの

癒やされたい　　癒やしたい　　誰かに何を求めるの？

激しい雨をやり過ごし　　雷の音に怯えるの　　悲しい思い出しか呼び起こせないから

白い羽根よ　今　私を救い出して　その強い羽ばたきで
迎えに来てくれるなら　私は何処までも高く飛び立てる
優しき羽根よシャイニング・フェザー

2

真っ直ぐ過ぎて　頑張り過ぎて　みんなの中に居られ無い
茨の杜は何処までも見えて　体中が怯えるの
逆巻く時の風　指差す人の言葉は剣の様に鋭くて　傷付い飛べ
無いわ

白い羽根よ　今　この背中に蘇るなら　雑踏の監獄を飛び出
して　愛する貴方の元へ　癒やしの楽園に行けるはず
目映い羽根よシャイニングフェザー

幾千の無情の海で嘆く　漂って流れ着くのは地獄なんて信じない
白い羽根よ　今　再び蘇れ　全ての負の鎖を絶ち斬って
溢れる羽根を希望に変えて

白い羽根よ　　シャイニングフェザー
目映い羽根よ　　シャイニングフェザー

歌い終わったミシェルは、

「今日も最後までありがと～。　また、ここに立って皆さんと会いたいな」

盛大な拍手が・・・・終わらない拍手が・・・フロアを埋め尽くす。　惜しむ声や、アンコール・・・ミシェルが神主の下に下がっても、そのファンの声は止まなかった。

ミシェルは、この歌の意味も良く解らなかったけど、飛んで行きたい人の腕の中は想像が出来た。　ミシェルの心の中には、生まれながらになのか・・・生まれてからなのか・・・何かの鼓動が産声を上げていたのだった。

「終わりました。　タカヒロ様」

見上げて笑う相手は・・・。　ミシェルは、今夜も惜しまれて下がった・・・。

其の四話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

いやいや、長く間を空けまして＾＾；

鬱気味で、忙しいんだか暇なんだか解らない生活がヤバイっすね＾＾；

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

其の五話

5、ミシェルの日常ーその1

朝、部屋が明るくなった。

「ん？　・・・・朝か？」

神主は、ベットの上でムクリと起き上がった。　白い、金属の台の様なベット、床に直寝しているような硬さが、神主にはいいらしい。　黒いカジュアルシャツの前のボタンは填めておらずに、裸の半身が見えている。

だが、それだけではない。　神主が寝てから、神主のバイオリズムを管理する体調管理システムが部屋全体に巡らされて。　睡眠の時間と、神主の体調に合わせて、天井が明るくなるのも実はこのベットに内蔵されているセンサーの御蔭。

「ん？」

隣を見れば、ミシェルが可愛いピンクの熊のキャラクターのプリントが入ったガウンスカートタイプの寝巻きで寝ている。

「・・・・」

神主は、自分の隣にミシェル用のベットを作ったのだが、どうしてもミシェルは神主の横に潜り込むのだ。

本人、曰く。

「だってぇ～。　神主様って温かいです」

と。

（まったく・・・どうなっている？）

神主は、ミシェルがどうも解らない。

嫌・・・神主がミシェルを解らないだけじゃない。　ミシェルも神主を理解出来ないのだ。　だが、ミシェルは神主の定めたプログラム教育の中で、自分の好きな事をやると教育は受けている。　それが、答えなのかもしれない。

だが、神主は人の心の機微が解っても、受ける人間では無かった。

「ミシェル、起きなさい。　朝だ」

神主は、ミシェルを揺り起こす。　言う事を聞かないからと腹を立てる性格でもまたない神主である。

「はぁ～い、ふぁ～・・・・」

ミシェルが身を起こすと、いきなりベットに三つ指を点いて。

「おはようございます、ご主人様」

その仕草を見た神主は、ポッカーーーーンっとミシェルを見る。

（何処で・・・覚えた？）

暇な時のミシェルには、気の向くままに好きにさせているので。
彼女はテレビを見たり、インターネットで何かを検索したり・・・。
とにかく、ミシェルは神主から離れない。　神主が外に出れば出たがり、居れば居たがる。

神主は、頭を掻いて。

「ホラ、起きるぞ」

と、ベットを降りる。

「はぁい」

ミシェルもベットを降りた。

神主は、ミシェルを夜だけクラブに立たせて歌わせる。　もう、あのステージ初日から立った回数は４回を数える。　３日か４日起きに歌わせている。　人気は上々。　告知無しの、不定期登場なのに、ミシェルがステージに上れば。　客がメールなどで情報を送るために、時間の進むに連れてダンスフロアは満員になる。

昨日は、アキハバラＴＶと云う番組で、“シャングリラに現れる謎のアイドル”とか云う特番で、撮影が来ていたとか。　内容は、シャングリラでステージに立つインディーズアイドルの卵達の紹介だが。　探していたのは、完全にミシェルである内容だった。

神主は、いずれはミシェルをアイドルとして大きくデビューさせる

方向だ。

ただ、まだ色々と壁もある。

一つは、所属プロダクションだ。　ミシェルの事では、ある程度は神主サイドに融通が利いて貰わないと困る。　ミシェルそのものが、未知のヒューマノイドだからだ。

それに、やはり金も。　ギャラの云々では無い。　ミシェルを商品としているのは、あくまでも神主である。　一方的な商業戦略を組まれても困る。

さて、今日はな～んもやることが無く。

神主は、トイレに行って考えて、出てくると・・・。

「神主様、ご飯出来ました～」

と、ミシェルが寝巻き姿のままにフライパンを握っている。

（う～ん・・・・家族染みて来てる・・・）

神主がミシェルに思い描いたイメージとは、かなり逆の方向だ。もう少し我儘で、掴み所の無いほうが、客に受けやすいと思うのだが・・・。

明るいライトの下、白いテーブルに座り。　ミシェルと向かい合って、スクランブルエッグとトーストにスープ・・・。　かなり美味い。

「ミシェル」

パンを片手に神主。

「ハイ？　なんですか」

スープを掬ったミシェル。

「モグモグ・・・・ん・・お前、何処にでも嫁に行けるな」

「そ・・・そうですかぁ～」

急に、ミシェルは顔を赤らめて下を向く。

神主は、パンにバターを塗りながら。

「これだけ料理上手で、家事全般はパーフェクト・・・いずれは、お前も誰かのお嫁さんだ。　俺が、相手にお前を連れてヴァージンロード歩かないとなぁ～」

ミシェルは、首を傾げて。

「ヴァ・・ジン・・・ロード？」

神主は、ミシェルを見て。

「知らないか・・・ま、まだ知らなくてもいいか」

と、云う。

ミシェルは、結婚と云うことを昨日知った。　検索したのだ。

（今日も、検索ですぅぅ～）

ミシェルは、気合いを入れてそう思った。

さて、神主は食事が終わり。　ミシェルと跡片付けをしてから、会社を任せている友人と連絡を取り合ったり、運営状況の報告を聞いたり。　終われば、もう一つのプロジェクトの考案や技術開発の草案にと動く。

一方・・・ミシェルは・・・。

（ケッコン～・・女のシアワセ～・・・、出前でっきるっかなぁ～）

神主の身の回りの世話を終えると、彼女専用のＰＣに向かう。　研究室に有るダンス・ヴォイスシミュレートトレーナーの脇に、デスクと一緒に買って貰った。　そこで、日課の検索生活に入った。本の様なノートチェッカーと呼ばれる所に、タッチペンで検索したい事柄を説明書きしても検索してくれるのだ。　商品の注文も出来る。　（けして・・・つう○○生活では無い）

さて、昨日は言葉だけだった“結婚”について。　ミシェルは、結婚式の遣り方から、結婚の定義や流れ、ウェディングドレスのアレコレまで見る。

（・・・ドキドキ・・・・ドキドキ・・・・）

その中で、ミシェルは、

【結婚とは、愛する人と共に生きる決意であり・・・】

と、結婚の定義に目が奪われていた。

（？　・・・愛？　愛って・・・・何？）

ミシェルは、ＰＣの前で考え込んだ。

神主は、次のステージの上に立つ時の衣装が困る。　業者から送られて来たのは、どれも風俗のコスプレ衣装ばかり。　前回の“アオザイ”と云う民族衣装のアイディアは、園田の下に居たスタッフの案だが。　神主からすると、こっちのほうが理解が行く。

（う～ん・・どれもイマイチだ。　仕方ない、ミシェルに決めさすか・・・）

ふと、ミシェルを見ると、ＰＣの前で右に左に頭を揺らし、ミシェルは何やら思案中である。

（な～に考えてるんだか・・・）

「お～い、ミシェル」

神主はミシェルに声を掛ける。

ミシェルは、最初呼ばれているのに気付かなかったが。　神主がミシェルの頭に丸めた紙をポ～ンと投げて、当たって初めて。

「あれ？　何？」

と、頭に当たった物を確認しようとしたときに。

「うぉぉぉい、ミシェルっ」

と、神主の声が聞こえた。

「あ、ハ～イ・・何ですか？」

ミシェルが立ち上がった。　スタスタと歩くミシェルは、神主の下に向かった。

全く整理されていないゴミの山な机の前に、神主は座っている。このテーブルだけは、ミシェルにも片付けさせない神主なのだ。

前に来たミシェルは、短い黒のスカートに、白い袖の長いＴシャツ姿。

「ミシェル、何を悩んでた？」

ミシェルは、俯く。

神主は、呆れて。

「ま～た訳の解らん事を調べたのか？」

この前は、何を調べているかと思ったら、新聞やニュースに出ていた痴漢の事を調べて、

“神主様、女性とは電車の中で触られるものなのですか？　服も脱ぐのですか？”

と、質問し。　神主が食べていたたこ焼きを喉に詰まらせて、危うく窒息しそうだった。

今日もミシェルは、悩む素振りで首を傾げて。

「はい、愛って・・・なんでしょうか。　結婚には、愛が必要だとありましたが。　私、愛が何か解りません・・・」

神主は、ミシェルを見返して困った。　自分の最も不得意な分野である。

「ミシェル、愛ってのはな。　人を好きになってから知る事だ。まだ、お前は人を好きではないだろう？」

すると、ミシェルは更に困惑した顔で。

「“好き”・・・ですかぁ～？　ん～神主様をなら、だぁ～い好きです」

「アホ。　それは、教育で俺に従うように学んでいるからだ。　それは“好き”では無い」

「はぁ・・。　ではぁ・・解りません」

神主は、困ったが。　コレも人と同じ身体の為と思って。

「まあ、いい。　ゆっくり考えなさい。　それより、今度のステージはどうする？　いっそう、ウエディングドレスでやるか？」

ミシェルは、パッと明るくなり。

「は～い、それ着たいですっ」

「うん、解った。　じゃ、衣装スタッフでも誰か作るか・・・。俺が毎回悩むのもバカらしい・・・」

神主は、自分の手からミシェルを少しづつ離そうと考えた。

その晩、ミシェルがせがむので、一緒に風呂に入れば・・・。

「ドキドキ・・ドキドキ・・・ドキドキ・・・」

ミシェルは、神主の裸を恥ずかしがっていながらも、注目する。

頭を洗う神主は、床に座りながらに。

（コイツ、メチャクチャ男に興味あるなぁ。　恋愛も早いかな・・・来年に父親代わりで歩くかもしれん・・・ヴァージンロード）

ミシェルは、湯船に浸かりながら、浴槽から顔半分を除かせて神主を見ていた・・。

其の五話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾；

最近、全てが何かに偏り気味で、ノイローゼに近い毎日です＾＾；

あ～、なさけね；＞；

ミシェルの衣装について、一番頭が回らないので、困る今日この頃です～（；０；）

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

其の六話

≪秋の或る日のエトセトラ　1≫

それは、或る秋も深まる日曜日だ。

「お帰りなさいませ、ご主人様っ」

「ようこそ御出で下さいまして、ご主人様っ」

アキハハバラの駅前に聳える総合ハイエンタービル【シャ・ン・グリ・ラ】。　その地上部数階を席巻するメイド喫茶を含めた総合アミューズメントフロアに、若々しい女性の声が上がる。

色取り取りなメイド服に身を包む美少女達が、今日も遣って来る客を待っている。

だが・・・。

カウンターに程近い席には、バイトを終えた女の子か。　若い女性3人の姿が見える。　私服の客らしき未成年の少女二人と、メイド服に身を包む少女。

私服の一人が、カウンターを見て。

「嗚呼・・・、なんてイケメンなのぉ～」

と、カウンター前に立つ長身のウエイターに、うっとりとした視線を送る。

別の私服の少女も、完全にウエイターの男性へ目を奪われたままに、気持ちが何処かにいってしまった様子で。

「でしょ～？　“週一の貴公子”とかぁ～、“半月王子”とか言われる人なのよ・・。　はぁ・・、どうにかして付き合えないかなぁ」

そんな二人を一瞥したメイド姿の少女も、うっとりとウエイターを見て。

「ムリですわぁ～。　だってぇ～、お店で働くだぁ～れもムリなんだもぉ～ん。　嗚呼・・カンちゃん・・・、こっち向いてぇ～」

女の子達の憧れる視線を集めた１８０を超える長身のウエイターは、知的さ迸るスマートなイケメンだ。　ほど良い長さの前髪が、キツさを感じさせない切れ長の瞳に凭れ掛かる。

そう、かの“マッドサイエンティスト”だとか、“貴公子科学者”だの幾つもの異名を持つ天才、神主が働いているのである。

新たにミシェル二号を作ろうと考えているのだが。　微妙にその研究が上手く行かずに行き詰まり。　気分転換に、バイトに来ていた。

ま、原因の一つは、何とも掴み処の解らぬミシェルの所為でもあるが・・・。

夕方。

自分に見惚れて、高い席代（チャージ）を覚悟で居続ける女性達等そ知らぬままに。　仕事を切り上げて更衣室へ。

このフロアで働くウエイターは、年配者では彼一人。　更衣室の奥の、暖簾で仕切られた狭いロッカーが並ぶ場所に行こうとすると・・・。

「あっ、カンちゃんだっ」

「うわぁ～、ひっさしぶっり～」

「アタシ、二ヶ月ぶりだぁ～見るの」

と、メイド従業員として働く女の子達が、下着姿だったり、上半身を裸のままに寄って来る。

神主は、そんな数人の女の子を見て、つくづく女の子の思考が解らず。

（おいおい、そんな裸とか下着姿で来るか？　俺、一応は男だぞ？）

と、呆れてしまった。

だが、神主の周りに寄って来る少女達の中、愛らしい胸を露にしたままで揺らして来る女の子は。

「見て見てっ、カンちゃんっ！　Ｃカップに格上げしたのぉ～」

と、白い素肌で、ふっくらとした肉付き良いバストを、自身で揺すって見せる。

「やだっ、ユイナ」

「うはっ、色仕掛けバリバリじゃんっ」

「女としてサイテー」

大して驚きもしない感じで、女の子達は騒ぎ出す。

中には、その胸を露にした女の子の胸を、背後から手を回して。

「こ～かぁ～、こうされたいかぁ～」

と、揉み弄り出す始末。

（おいおい・・、此処は一体何なんだ？）

女の子達の羞恥を知らぬ騒ぎ様に呆ける神主。　しかし、科学者気質の強い神主は、マジマジと女の子達の胸を見回しながら・・。

（しかしまぁ・・、確かにほど良い形だ。　成長期だから、肥大したのか・・。　だが、こう目の前にすると、よくよく見ると不思議だな。　ホルモンバランスだけでは、大きさに準じて形の良さや見栄えが整うとは限らない訳か。　男性に好かれる胸の形をデータベース化して・・、下着等で形を調整するのも・・・・云々）

と、観察の道具に過ぎない結果と成る様だ。

さて。

着替えた神主は、従業員の女の子達と別れ。　ビルの地下にあるラボへと、エレベーターで降りた。

到着したラボへと続く一本廊下。　簡素で質素な金属質の壁。

途中に掛かる白衣を取り、颯爽と羽織った神主は、行き当たりの自動で開いた半透明のガラス戸を潜った。

公式テニスコートが丸々入るぐらいの広いフロアには、理科室などで見掛ける長い机が見え。　その上が、酷い散らかり様を見せていたり。　小難しい大小の機械が、フロアに点在して隙間をを埋める。

「お～い、ミシェル」

実験体として、初めて生み出した人間のヒューマノイド、ミシェル。
彼女は、このフロアの何処かに居ると、神主が呼んだのだが・・。

「はぁ～い、ご主人様ぁぁ～～」

と、緩いミシェルの声がしたかと思うと・・。

（何だ？）

神主は、散らかった机の影から、ミシェルが飛び出して来るのが見えた。　四つん這いの格好で、ピョコ～ン・ピョコ～ンと跳ねて来るミシェル。　不意を突く間合いで、突然に訳の解らぬ登場の仕方をしたミシェル。

（な・・何だぁ？）

訳の解らないミシェルの格好に、急な脱力感を覚えてコケた神主。

「あうぅ・・」

床に何とか片立膝で座った神主の目の前に来たミシェルは、丸でカエルの様な姿勢をして床に手を着いたままに。

「ゲコゲコ～、お帰りなさ～い、ご主人様～」

ミシェルの格好と、その言い草に明らかなるアンバランスを感じた神主は、自身のてで頭痛のし始めた頭を抑えつつ。

「・・・、ミシェル。　もう・・・マスターでいい。　それより、その格好は・・何だ？」

上目遣いで見上げて来るミシェル。　頭には、ネコの耳を模ったフサフサした物が付くカチューシャをし。　足には、着ぐるみの様な同じくネコの足をイメージした靴らしきもの履いている。　更に、胸を隠す様に上半身に着用されているのは、ネコのアメリカンショートの毛色をイメージしたビキニスタイルのブラ型の下着。　同じく、下半身に着用されているのは、フサフサしたマーブルグレーの色をした紐で留めるパンツを穿くのみと云う格好。　お尻の部分には、ご丁寧に５０センチを超える尻尾までが着けられていた。

「みってくっださぁ～い、新しい衣装です～」

神主が見るに、それは完全なるイメージクラブなどで使用されている、コスプレ衣装であった。　露出度が多過ぎるし、アニメのキャ

ラクターの様である。　手や足の形をした物は、肉球がピンク色で、しかもデカい。　マイクを持って、踊り回れるかは微妙な所だろう。

だが、何より神主が一番気に成るのは・・。

「ミシェル、おま・・お前、その格好は、・・。　てか、跳ね方がネコですら無かったぞ？」

ミミを見上げるミシェルは、

「ええ～っ？！　コレってぇ、カエルさんじゃないんですかぁ～？」

何処をどう間違えると、この衣装でカエルになるのか・・。

「ミシェル・・、其処まで着て、カエルだと思ってたのか？　その衣装は、ネコだネコっ」

「え〝ぇ～、コレって目玉じゃないんですかぁ～？」

フサフサした毛に覆われたミミを触り、頬りに感触を確かめるミシェル。

すると、其処に。

ゴチャゴチャした長く面積の或るテーブルの隅。　小さい鉢植えのカラフルな色をしたヒマワリが、ダンシングフラワーの様にクネクネと動きながら。

「マスターっ、ソノコナントカシテクレヨっ！！　オレヲツカマエテっ、ビームダセっテイウンダヨッ！！　シカモオトトイハ、メツ

ブシコウセンヲダセッテクビシメルシっ！！！！！」

その玩具の様な花は、口も目も備え。　しっかりとサングラスまでしている。　神主の生み出した、人工知能を持ったロボットの一つ。

神主の友人的な存在である、“ロビンソン”である。

呆れて立った神主は、ミシェルを見て。

「ミシェル、ロビンソンはアニメに出る様な兵器じゃない。　ビームなんて、出る訳無いだろう？」

「そぉなんですかぁ～？」

「いいから、もう立ちなさい」

「は～い」

立ったミシェルは、愛らしいネコ娘の様で。　キャッキャとはしゃいでは、

「ネ～コネ～コ、ニャ～ンニャン」

と、歌い出した。

神主は、ミシェルの行動が子供染みていて、何とも掴み難いと困惑した。

ー夜ー

【ネコのお願い】

ワタシ　ネ～コネコ　ネ～コ

気ままに　のんびり　わがままに～

貴方に甘えて愛しちゃう

寒い夜は　寝ている貴方の脇に忍び込むわ

満月の夜は　可愛い女の子に変身よ

捕まえて　捕まえて

このハ～トと一緒に～

優しくね　優しくね

抱きしめて欲しいのぉ～

ワタシは　ネッコネコネ～コ

遊ぶの大好きネコの女の子～

地下二階のライヴクラブのステージ上で、ネコの格好をしたミシェルが踊って謳う。

ネコの女の子をイメージしたダンスでは、可愛いネコの仕草を見せながら軽快なアクロバットも難なくこなすミシェル。　M字開脚までキメて、男性客を多いに湧かせた。　歯に被せるタイプのマイクを使い、あの衣装でも難なく謳うミシェルだった。

「みなさ～ん、ミシェルで～す」

合間を繋ぐトークまでする様になったミシェルは、一人でも喋れる様になり・・。

「明日は、晴れてたらリュウセイを見たいとおもいまぁ～す」

すると、客席から。

「ミシェルちゃーーーんっ、一緒に見よーーーーっ！！！」

と、コアなファンが声を上げる。

ニッコリ笑うミシェルは、

「ニュフフ、誰と見るかは・・ヒ・ミ・ツ。　でも、キレ～なお星様見えるといいなぁ～って思ってます」

そして、優しいサウンドが流れ。　青いスポットライトに照らされるミシェルは、また歌い出す。

【スターライトファンタジー】

青い星が　遠くから囁くように　光を届けて
夜空に見える　星の鼓動　聞こえて
愛し合った二人の　約束を示す様に
夜空を駆ける　一筋の流れ星の煌き

ねぇ　耳を済ませて　聞いて欲しい　愛の歌を
只一筋に　届く様に　歌うから・・・

光る星は　丸で命のよう　燃える様な
何かに向かって　突き進める勇気
失った夢さえ　また取り戻せる
ひたすらに　あの星へ飛んで行けたなら

あぁ　悲しみが　世界を覆うとしても
希望の光　忘れないで　あの星の様に・・・

ミシェルは、歌う歌に合わせて声のトーンも多少上げ下げ出来る。
　最初のカワイイ声から、少し大人びた声にしても、全く違和感を感じさせない。　その歌唱力が、歌毎に客を魅了するのだ。

その後、何曲かカヴァー曲を歌った後。

「え～と、今日のお別れの曲です。　では、衣装のき・が・え～」

神主がさっとステージ脇から現れ、ミシェルの首から下を黒い暗幕の様なマントで隠した。

「えへへ～」

ニコやかに笑うミシェルは、スッとネコの衣装の上を外し、皆に見える様に上に持ち上げる。

「うおおおおーーーっ！！！」

「ヒューヒューっ！！！」

客席やホールから、興奮の歓声などが上がる。

「もうひと～つ」

と、ミシェルは、ブラ型の衣装を投げ。　また、手足を動かした。

「ヤッホ～～～っ」

「イイぞーーっ、ミシェルちゃーーーん！！！」
男性ファンから更に興奮した声援が上がった。
そして・・・。
ミシェルは、手を上げて。
「ヨイショ～」
と。　その手には、衣装の下着が・・・。
其処で、神主がマントを引いてミシェルの身体を・・・。
「うおおおおおおおおおおおーーーーーーーーーーっ！！」
一気にホール全体が湧き上がった。
「ヤッホ～」
なんと、ミシェルはピンクのメイド服に。

【メイドのため息】

ご主人様、今日の用事は・・何ですかぁ？

可愛いフリルをの付いた服を　揺らして今日もオシゴトなの～
お掃除・・洗濯・・料理もバッチリ～
何でもできちゃう　それがメイドなの～

好き　好き　好き　ご主人様
ラブ　ラブ　ラブ　云い付けも頑張るの～

良く出来たら　褒めてね。　出来なかったら　叱ってね
生きてる　働く　アナタを支えるの～

頭に見える白いカチューシャ　トレイドマ～クよ
チョッピリ　ドジも　許してね
一人でおうちに居ると　ちょうと寂しいわ
時には寂しい夜も　あるけれど　メイドは笑顔が　命なの
ご主人様を　花の様な笑顔で迎えるの

好き　好き　好き　ご褒美

ラブ　ラブ　ラブ　ご主人様とのお話

変わらない毎日を　笑顔で行くわ　私おしゃまで元気な　メイドなの～

ミシェルの歌う姿を見ている神主は、頭を抑え。

（はぁ～、ノリで作った歌だと聴いたが・・・。　作詞作曲には、俺も加わろうかな・・。　何だ・・コノ歌）

ミシェルのプロデュースプロジェクトの面々は、時々こんな歌を持って来る。　ま、試作披露の場だからいいが、神主にはその趣向が解らない。

しかし、ホールからは、ミシェルの愛らしさに狂ってるファン。並びに、かなりの盛大なアンコール＆ａｍｐ；ラブコールが飛んでいる。　ウケは先ず先ずと云った処だった。

其の六話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

久しぶりに、ミシェルを数話更新いたします＾＾；

ご愛読、ありがとう御座います＾人＾

其の七話

≪秋の日のエトセトラ　２　≫

ーとある晩秋も近づいた頃ー

神主は、仲間のスタッフ１４・５人とミシェルを連れて、紅葉を見に信州へと向かった。

ミシェルには、睡眠学習などで教養は教えてあるが。　体験的な応用教育は、こうして連れ出さないといけないと感じていた。　ミシェルは、どうも精神的な発達が未熟な一面を持ち。　初期設定としての１７・８の少女と云う感じにしては、まだまだ幼い感じがする。

さて、スタッフの中には、あの紳士的な支配人の薗田氏や、会社を任せる重役なども含まれる。　若いスタッフの何人かは、密かに神主を手伝う技術スタッフの若者でもある。

神主は、人間的には曲がりの無い人物だ。

この働くスタッフ達。　実を言うと施設育ち。

現代に何かと多くなった育児放棄だの。　家庭崩壊で施設に収容さ

れた子供達なのである。

神主自体、家庭環境は極普通だと言って良かった。　だが、彼の親戚で、従兄弟だの伯父叔母には、結構離婚しただの、育児放棄された家族が多く。　ミシェルの様なアンドロイドを作る切っ掛けに成ったのも、金目的だけが全てでは無いのだ。

現に、彼の稼ぐ莫大な利益の一部は、そうした放棄児童の保護施設や。　家庭が半壊して、母子が逃げ込める駆け込み寺の様な施設の運営にも回っている。

またこう見えて、神主は政治や業界に金をバラ撒く様なマネは好きでは無い。　そういう事をしなくても、スマート且つ、ウザい倫理をなし崩し的し、ロボットや発明品を世に送り出した。　施設で育った若者達の優秀な者にアイデアを出させ、世間のわき道を真っ直ぐに渡って来た一面も在るのだ。

ま、基本的に感情的な一面は見せず、クールにドライに遣って来ている彼のそんな活動を知るのは極一部と云う訳だが。

前持った予約にて、キャンプ地で大きな2階建てのコテージを借り受けておいた神主。

車3台でコテージの敷地内に入り。　直ぐに一台が買出しへと出掛け。　神主は、他の若者達と荷物を降ろし始める。

ミシェルは、自分の荷物と神主の荷物を降ろしていて。　庭先に置くバーベキュー用品を出す神主が、

「ミシェル〜、ロビンソンを忘れるな」

「はぁ～い」

山ガールの様な衣服に成っているミシェルは、帽子まで被って様に成る。

「ロビンちゃ～ん、お宿だよ～」

「ミシェル、ヤサシクモテヨ・・。　ッテ、イッテルソバカラアタマヲモツナァァァァーーーっ！！！」

「えへへ、鉢の方だったっけ？」

「ナンドイワセルンダァっ！！　ハチノホウヲモテトイッテルダロウガっ！！！」

ロビンソンに怒られても、照れ笑いをして動じないミシェル。

だが・・・。

「オイオイ・・。　オチテルオチバヲ、オレノハチニソエルナ」

とか。

「オーーーイっ！！　マツボックリヲオレノアタマニノセルナァァァーーーっ！！！！！」

とか。

そして、その内・・。

「モンガァァ！！！　フゴモっ。　オフガモモっ！！！！」

と、遂にロビンソンが変な呻きを上げて口を利けなくした所で、飯盒などの準備をしていた神主が堪り兼ねてミシェルに向くと・・・。

「お・・おい、ミシェル・・」

見えたのは、なんとロビンソンの口の中に、ドングリを幾つ詰めれるかと真剣にやってるミシェルが。

ロビンソンを助けた神主は、前のめりにゼーハーゼーハーと荒い呼吸をするロビンソンを見て。

「大丈夫か？」

「シ・・シヌカトオモッタ・・・」

ロビンソンをマジマジと見つめるミシェルは・・。

「ロビンちゃん、なぁ～んも食べないです。　マスター。　ロビンちゃんは、草とか木の実とか食べるんじゃないですか？」

機械で、充電すればイイだけのロビンソン。　自分で動き、マグネット充電器を遣って夜に充電を終えていたロビンソンは、ミシェルに向かい。

「オバカーーーーっ！！！　ナンベンモ、オレハキカイダトイッテイルダロウガァァァーーーっ！！！！！」

と、怒声を張り上げる。　ヒマワリに叱られる人工の人間とは変わった様子である。

すると・・。

「マスター、ミシェルは機械じゃないんですか？」

と、突然にミシェルが云う。

ロビンソンは、ピタリと動くのを止め、神主を見る。

神主は、買出しに行った薗田達や、先にコテージへ行った若者達が戻らない森の中で。

「ミシェル。　ミシェルは、機械じゃないんだよ」

すると、スタスタと神主に寄るミシェルは、

「解らないです。　人は家族がいて、生まれて出来上がると在りました。　でも、ミシェルには、お父さんもお母さんも居ないです。　何時生まれたのですか？　ミシェルは、機械とどう違うのでしょうか？」

神主は、ミシェルが真面目に言うので、自身も真面目な顔をして・・。

「ミシェルには、お父さんもお母さんも居ないよ。　私が、ミシェルを作り出したんだ。　だが、ミシェルは機械でも無いんだよ。機械は、金属やコードで作り出す物。　だけど、ミシェルは人と同じ生き物なんだ」

「・・・カエルさんや、ネコさんと同じ様なですか？」

「そうだよ？　睡眠学習で習っただろ？」

「・・・はい。　でも、ミシェルには、誰も居ないです・・。　創ってくれたマスターと、機械のロビンちゃんだけです・・・」

急に思いつめた様子に成るミシェル。　彼女を見る神主は・・・。

（ふむ。　自我が成長し始めたか・・）

ミシェルの言動を聞くに、自己の存在定着を探すと云う精神が発達し、自己存在の起源や存在定義に踏み込んだ思考や、存在意義の模索、存在を確信する為の事実を模索する思考が働く様に成った様だ。
親の解らない子供などが見せる様子と酷似している。

（毎日色々考えているだけ在るな。　精神面も成長している証だ。
さて、そろそろ自発的に何かをさせる方に誘導しないといけないか・・）

ミシェルの成長が順調なのを見て取った神主。

「・・ミシェル」

俯いたミシェルは、呼ばれて神主に少し顔を向け。

「はい・・」

「ミシェルは、今は一人だ。　確かに、ミシェルに血縁と云う遺伝

子レベルの家族は居ない。　だが、ミシェルは列記とした女の子だ。
いずれ、子供を産める様に成るし。　将来は、家族を築くだろう。
それに、近々ミシェルの妹が出来る。　ミシェルと、血を分けた家族だ」

ミシェルも、神主が新たな研究をしているのは知っている。

「本当ですか・・マスター？　ミシェルに、家族が出来るんですか？」

「あぁ。　だが、出来るのは・・・、早くてクリスマス頃。　遅ければ、来年だろうな」

ミシェルの顔が、一気に明るく成る。

「妹・・家族・・」

期待に胸を膨らませる様子を面に出したミシェル。

神主は、其処で。

「ミシェル、いいかい？」

「はい、マスター」

「妹が出来れば、君が妹に名前を付けるんだ。　そして、君が先に学んだ事を教えるんだ。　イイね。　ミシェルの毎日は、生活するに不自由ない知識と経験を学ぶ日々なんだよ。　だから、毎日を元気に送って欲しい」

「はいっ」

「さ、荷物を運んで」

ミシェルは、素直に頷いて荷物を運ぶ作業に移る。

その姿を見る神主に、ロビンソンは。

（マスター・・。　ミシェルハ、ダレカトケッコンスルノカ？）

神主は、抑えた声で。

（いずれな。　今は、まだ無理だろう）

（ソウナノカ・・）

（ミシェルの体は、見た目は１７・８の女だが、中身はまだ１２・３の少女と変わらない。　もっと発達する頃が来るはずだ）

（マスター。　アイテハ、シンチョウニエラベヨ。　アノコハ、シヌホドシンパイダ・・・）

（ロビンソン、心配してくれるなら・・。　見合い写真は一緒に拝むかい？）

（・・・ゼヒ）

（そうか）

神主は、コテージに入るミシェルを見ていた・・。　その背中の面

影が・・・心の中に浮かぶある人物と重なる。

（創った以上は、人にしてみせる。　愛を無限に創れるなら、不幸は縮小するさ）

神主の心の中に、強い意志が超新星（スーパー・ノヴァ）の如く光を放つ。　彼の生涯を掛けた挑戦であった・・・。

さて。

ミシェルを連れ、夕方前に神主は皆と間近の湖へと出掛けた。

ケータイや一昔前のキャッシュカードの様に薄いデジカメで、若者のスタッフは紅葉の美しい湖畔の風景を写したりしている。

神主やミシェルと共に歩く薗田氏。　ハイキングジャッケトに、ベスト、チェックのYシャツと云う紳士スタイルは変えないままで。

「しかし、紅葉は素晴らしいですな。　半年掛かって育った葉を、色づかせて落す・・。　生命のサイクルとしては当たり前なのでしょうが。　この様に尽きる前の命が色鮮やかに燃える。　素晴らしい以外に言葉は要りませんな」

神主は、薗田氏が饒舌なのに微笑み。

「薗田さんが良く喋るとは珍しい」

「あはは、ちょっとセンチメンタルになりました。　昔は、妻と一緒に良く旅行に行きましたものですからね」

「なるほど」

ミシェルは、湖畔の木々を見ながら。

「マスター。　この木は、全て死んじゃうんですか？」

枯葉の絨毯の上を歩く神主は、ミシェルに紅葉の理由を教えた。

聞いたミシェルは、楓や公孫樹、橡などの木々を見て。

「紅葉って、命の輝きなんですね～」

薗田は、ミシェルを見て目を細め。

「いやいや、ミシェルさんも紅葉の意味がお解りの様だ・・」

神主は、ミシェルの肩に腕を回し。

「ま、植物も動物も変わらない。　最も輝ける時は、子孫を残そうとする時と、若く何かに向かって成長する時。　・・、今のミシェルは、先ず成長をする時に来てると云えるかな」

ニコっと微笑むミシェルは、神主のポケットにいるロビンソンを見て。

「マスター、ロビンちゃんは枯れないんですか？」

やっぱり意味を理解していないと解ったロビンソンは。

「オレハキカイダトイッテオロウガッ！！　ソンナニオレニシンデ

ホシイノカっ？！！！」

ミシェルは、ロビンソンをジッと見ていて。

神主は、

（ロビンソンの何が気に入らないのだろうか・・・）

と、呆れるしかなかった。

神主がスタッフを連れて来た理由は、只の観光でも無い。　ミシェルの歌う歌の作成や、衣装などの打ち合わせのアイディアを絞る意味合いも含まれていた。

薗田とは、ミシェルの登場やステージ上での演出を話し合う意味から付いて来て貰った訳だ。

約1週間の滞在だが。　この間も【シャ・ン・グリ・ラ】の営業は続けられている。

その運営は、ミシェルにも興味を示す社員の一人に、神主は任せている。　ガリガリに痩せた小男で、経営センスと行動力に優れた“祭事　亮”（さいじ　あきら）と云う中年男である。

神主は、下手な幹部社員よりこの男を買っていて、何事も云わずしてこうしているのだ。

さて・・。

ミシェルにとって、この外泊は楽しい物となった。

「わ～いわ～い」

湖面に浮かべたボートを爆走するバイクの如く漕ぐミシェルは、他の訪れた客達に“ＵＭＡ”が現れたと驚かせ。

神主にボートを禁じられると、今度は落ち葉を山を築く様に集めてはハイキングコースを塞き止めた。

次の日。　早朝にハイキングへと出掛けた人達が、落ち葉で出来た壁に出くわして騒ぎに。

神主は、ミシェルの存在を公に出来ないから傍観を決め込んだが・・・。

（早く・・・早く教育を進めねば・・・。　何れバレる・・・、ヤバい）

所が、その二日後。

神主が車でスタッフ数人と出掛け、他のスタッフは仕事にそれぞれ向かっていた。

暇で仕方の無いミシェルは、スタッフの一人が持って来ていたスキューバーの一式用具を勝手に借りた上に、一人で湖へ。

丁度、買出しに出ていた神主不在の所だが。　残ったスタッフは、環境の変化で刺激を受けたのであろう、アイディアを捻るのに皆が夢中に成っていて、ミシェルに気付かなかった。

ミシェルは、神主の開発した時計型アームＰＣからスキューバーの遣い方を知り。　勝手に湖へと潜る。

湖に潜ったミシェルは、泳いでいる魚を追い回しては、ボートに乗る客を驚かせ。　コケと水草に巻き付かれたままに姿を湖面へ。

神主が車を運転して戻ると、湖の周りを捜索する住人と出くわし。

「アンタらっ、気ーつけっ！！　カッパか、この地方に伝わる妖怪のアズミが出たんじゃっ！！」

と、注意をされる。

ミシェルの存在を真っ先に思って驚いた神主は、急いで戻る。

すると、遊んですっかり満足したミシェルが、シャワーを浴びていた最中で。　水草を絡めた酸素ボンベと、ドロドロに汚れた潜水服がコテージに脱ぎ捨ててあった。

神主の帰還を知ったロビンソンが。

「マスター・・アノコヤバイヨ・・・。　ソノウチ・・ゼッタイニバレルッテっ！」

神主は、ミシェルの奔放さに肩が落ち。

（はぁぁ・・、次のヒューマノイドは、もっと大人しくする教育プログラムを使うか。　ミシェルが二人居ては、身が保たん）

と、心に決めた。

其の七話（後書き）

どうも、騎龍です＾＾

ご愛読、ありがとうございます＾人＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6288g/

ヒューマノイド、ミシェルの恋歌

2011年5月12日11時34分発行